

**立教大学コミュニティ福祉学部地域連携・協働プロジェクト助成金
2017年度研究成果報告書**

研究代表者	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・福祉学科	岡田 哲郎 印
研究課題名	高島再発見！プロジェクト「高島プロジェクト」の再活性化へ向けてー	
研究期間	2017年度	
研究経費	99,765円	

研究の概要 (200～300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

〈研究の概要〉

本プロジェクトは、立教大学コミュニティ福祉学部と高島町との間に締結された「高島プロジェクト」の再活性化をねらいとして実施した。そのための方法として、①「学びのフィールド」としての高島町の価値を確かめるフィールドワーク（研究代表者及び研究協力者による調査）、②プロジェクト創設時からのキーパーソンへのヒアリング、③高島町で過去に社会福祉士実習を行った元実習生のコメント収集、以上を行い、それらの成果を報告書にまとめることとした。

なお②の大学側のキーパーソンとしては、故・森本佳樹名誉教授の過去の文章（実習報告集への寄稿文等）を辿ることで、高島町における実習の意味を振り返り、考察することとした。

〈研究組織〉

研究代表者 岡田 哲郎（福祉学科・助教）
 研究協力者 長谷部 里奈（福祉学科・4年生）
 研究協力者 高林 透恵（福祉学科・4年生）
 研究協力者 伊藤 圭司（福祉学科・4年生）
 研究協力者 渡辺 彰浩（福祉学科・4年生）
 研究協力者 上田 恭子（コミュニティ政策学科・4年生）

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

〈研究の過程〉

- 1) 富樫とみよ氏 (元・高島町役場福祉課課長、現・屋代地区公民館館長) のご協力 (コーディネート) のもと、2017年9月12日 (火) ~14日 (木) にかけて、2泊3日のフィールドワーク・ヒアリング調査を実施した。
- 2) 「高島町と立教大学コミュニティ福祉学部との交流」をテーマに、富樫とみよ氏へのヒアリングを実施し、記録化した。
- 3) 全体調査 (研究代表者及び研究協力者による調査) として、渡部宗雄氏 (上和田有機米生産組合)、神保一雄氏 (二井宿地区公民館) へのヒアリングを実施した。
- 4) 個別調査として、研究協力者5名のそれぞれの研究テーマ (「移住」「排除と共生」「地域コミュニティの解体と再生」「住民主体」「協働と中間支援組織」) に基づくフィールドワーク・ヒアリング調査を実施し、それらの成果を3) とあわせ、「高島町調査合宿レポート」と「学生のフィールドワークレポート」にまとめた。
- 5) 高島町で過去に実習を行った元実習生に寄稿文を依頼し、5名の協力が得られた。
- 6) 故・森本佳樹名誉教授 (コミュニティ福祉学部) が高島町及び高島町での実習について書き残した文章を収集し、「森本佳樹先生のコメントから辿る高島実習」として整理した。
- 7) 岡田徹氏 (元コミュニティ福祉学部教授) が作成した『高島プロジェクト』の略史」を、巻末資料掲載用として収集した。
- 8) 以上をもって報告書の素材が集まり、①高島プロジェクトのスタート時からのキーパーソンである富樫とみよ氏へのヒアリングを通して「高島町と立教大学コミュニティ福祉学部との交流」を振り返るパート、②高島町調査合宿レポートと学生のフィールドワークレポートから「学びのフィールドとしての高島町の価値」を確かめるパート、③元高島実習生のコメントと故・森本佳樹名誉教授のコメントから「高島実習 (地域ケア型実習) とは何か」を考えるパート、以上の3部構成で報告書を作成した。

〈研究の成果〉

第1部として整理した富樫とみよ氏のヒアリング記録では、「高島プロジェクト」の関係者が「高島町と立教大学コミュニティ福祉学部との交流」及び「高島町の地域特性」の概要を知るための、貴重な語りを採録することができた。具体的には、「町の概要」「青年団活動と有機農業について」「高島町の食」「高島町の地域特性」「立教大学コミュニティ福祉学部との交流」「地域ケア型実習」「遠隔地実習の意味」「地域福祉計画・調査への協力」「関係者との幅広い交流」「協定書の締結」「昔の共同の形」の小見出しによって整理した。

第2部については、2泊3日の調査合宿の様子をそのままに「高島町調査合宿レポート」として整理し、また、研究協力者のテーマに沿った個別調査を行い、レポート化することで、多様な視点から「学びのフィールドとしての高島町の価値」を叙述することができた。

第3部では、元高島実習生からの寄せ書き「私にとっての高島実習」として、「高島での経験が、今の生活や心の中にどう生きているか」という観点からの寄稿文を掲載した。また、故・森本佳樹名誉教授の過去の文章 (実習報告集への寄稿文等) から、高島町において行われてきた「地域ケア型実習」のコンセプトとねらい、実施までの経緯とそれが深化していく過程を叙述することができた。これらにより、単に「福祉」の枠組みで捉えることができない高島実習 (地域ケア型実習) の価値を確認するとともに、今日で言う「地域包括ケアシステム」を具現化する実習の先駆型として、その実践を再評価することができた。

以上の点から、「高島プロジェクト」の経緯と詳細を知る基礎資料として、または「学びのフィールド」としての高島町の魅力と価値を共有する基礎資料としてこの報告書が活用されれば、本「高島再発見!プロジェクトー『高島プロジェクト』の再活性化に向けてー」は一応の成果を残したと考えられる。また、報告書の巻末資料として掲載した『高島プロジェクト』の略史」を補足する情報としても、今後「高島プロジェクト」を総括し、展開する際に本報告書が活用されることが望まれる。

※報告書は100冊印刷・製本し、現在、関係者・関係各所に配布中である。

研究成果の概要 つづき**〈研究の限界〉**

上述のような成果があげられたが、「高島プロジェクトの再活性化」という大目的に照らしては、不十分な内容となったことは否めない。具体的には、立教大学全体として広く捉えた時の交流（特に農業体験プログラムを通じての交流）や、高島町側からみた交流、講師派遣事業（コミュニティ福祉学部大学院生の高島高校への派遣）や連続講座（コミュニティ福祉学部教員の高島町への派遣）を通しての交流、個々に交流を続けてきた方々の経験等、より多面的・立体的に町と大学の交流関係をみていく必要があったと、その限界について認識している。また、元高島実習生への寄稿依頼が遅くなってしまったことも反省点である。

〈今後の「高島プロジェクト」に向けて〉

上記のような限界や反省点は残るが、「高島プロジェクト」の再活性化に向けて、以下、三点を提案したい。

第一に、過去に高島町で行われた学部研修会のように、町と大学双方の関係者が顔を合わせ、互いの社会資源を確認し合える場や機会があれば良いと考える。互いの顔と顔が繋がれば、ゼミ合宿等のフィールドとして高島町を活用する際も、逆に町側として講座や研修を大学教員に依頼する際にも、両者の社会資源を能動的に活用できるのではないかと考える。

第二に、大学側の窓口の明確化である。大学側の窓口として、これまでは主に岡田徹氏（コミュニティ福祉学部元教授）や故・森本佳樹名誉教授を中心とした「個人」が担ってきた側面が大きいため、町側からすれば相談先の「入口」がやや不明確である。「組織」としての担当窓口の明確化、周知が課題と思われる。

第三に、町側からの整理である。本プロジェクト（報告書）は大学側から「高島プロジェクト」を振り返ったものだが、高島町側も世代交代が進むこの時期に、立教大学ないしコミュニティ福祉学部との交流についての振り返りがなされることを期待したい。

いずれも大ざっぱな提案となるが、現在が「都市と農村」の新しい関係性を見つめ直す一地点にあると考えれば、具体的な交流によってそれを考え、形にしていくために、この「高島プロジェクト」のもつ意義は大きいと考えられる。「高島プロジェクト」20周年の節目を迎える2020年度までに、上記の提案が具体化されることを願い（そして、ぜひ新座キャンパスの学食のお米を「高島の有機米」に!）、本「高島再発見!プロジェクト」の報告を終えたい。